タイトル：静かな夜の日に

　星々が輝く宵闇の下で、ソレは蠢いている。
　ソレは宇宙を無理矢理人の形に整えたような、不定形なモノだ。グネグネと僅かに形を変え、しかし人型であることは変わらない。
　顔は無い。眼孔も口腔も鼻腔も、人の顔のパーツをソレは持ち合わせない。どれだけ無理を重ねたとしても、辛うじて輪郭が似ている程度の共通点しか見いだせないだろう。

　ソレは外宇宙から飛来した生命体である。ソレは外なる神――旧支配者（グレートオールドワン）が放つ尖兵である。
　その身体は地球上に存在しない物体で構成されており、自然法則内では傷一つ負わない異常な性質を持つ。ある特殊な人間でしか対処不可能なソレを、人類は〝異星生命体〟と呼称する。
『……！　……！』
　不気味なほど静かな街。さして高くもないビルの屋上で、異星生命体は不気味な言葉を発している。それは人間には理解できず、発音することもできない。
　いや、発するのとは少し違う。空気の振動によって伝わる言葉ではなく、思念そのものが周囲の空間に伝播している。当然だ、異星生命体には声を発するための声帯が無いのだから。
「――耳障りだ。その不快な口を閉じろ」
　空を仰ぐように両手を挙げた異星生命体の頭を、何者かの足が踏みにじる。むき出しのコンクリートに一切の容赦なく押しつけられ、まるで廃棄されたゴミのような扱いだ。
　異星生命体を踏んだのは一人の青年だ。艶のある黒髪に紅と黒のオッドアイを備えた、中々の美青年。だが、その整った顔は苛立ちに満ちており、足の下のソレを憎しみの籠もった瞳で睥睨している。
「……なあ、黙れよ。黙れって、そう言ったよな？」
　足下のソレは先程と打って変わって金切り声のような、ノイズのような、とにかく聞く人全てに不快感を与える声を上げる。一種のホラーのような様相だが、青年は怯えることなく――むしろ抵抗するソレに不快感を抱く。腹立たしい、いっそ焼き尽くしてしまおうかと。
「……チッ」
　異星生命体は一瞬大人しくなった思えば、足を押し上げるように大きく膨らみ、青年の足から逃げ出した。
　不快な、しかし嘲笑っているようにも聞こえる声を上げながら、人外めいた動きで夜の街に消えていく。
「――フラム？　もしかして逃がしたの？」
「……なわけないだろ」
「じゃあ……にぃ、がんば」

　青年――フラムは忌々しげに否定した。それに、異能を使えば逃げても無駄だと内心で零す。その様子を咎めるわけでもなく、少女は笑みを浮かべた。
　彼女はまるで童話の中から出てきたような格好をしている。その容姿は赤ずきんと聞いてイメージする姿そのままである。
「……クソが」
　フラムはそれだけ言うと、一人屋上から飛び降りて追跡に向かう。フラムは都会の影に消えていった。
　誰もいない都会の夜だ。明かりの無い世界で、どこか寂しさすら覚えるであろう街中を走り抜けながら、だが、彼の胸に内にあるのは猛々しい怒りと憎悪だけであった。
――怒りを原動力に、憎悪を忘れるな。敵は……殺せ。焼き殺せ。
　途端、指向性を持った炎がフラムの右半身から噴出し、バランスを崩しながらも宙を飛ぶ。何度も何度も何度も何度も、加速しながら不規則に滑空するフラムの視界は、常に一つだけを捉えていた。
「追いついたぞ」
　異星生命体その言葉を聞き振り返ると、そこには炎を纏ったフラムの右手があった。
　フラムはソレの顔を掴むと、自動車並みの勢いのまま道路に叩きつけた。そして激しい破壊音を鳴り響かせながら道路を割りながら引きずり、建物を粉砕し、たまたま頑丈だっただけの倉庫らしき建物の壁に叩きつける。
「動けば殺す。動かなくても殺す。何をしても殺す。何をしなくても殺す。俺を苛立たせるお前は殺す。俺を苛立たせなくてもお前は殺す。仲間を呼んだら殺す。仲間を呼ばなくても殺す」
　ぎりぎりと頭を締め付けながら、憤怒の形相でフラムは続ける。
「お前は死ぬべき存在だ。俺の怒りをぶつけていい存在だ。だから、俺はお前を殺すんだ」
　炎は異星生命体を焼いている。だんだんと燃え盛り、赤色であった炎は黄色に染まっていく。摂氏三五〇〇度を超えた証だ。しかしそれで上昇が止まるわけではない。少しずつ、少しずつ白色に変化していく。
　コンクリートの道路が融解する。ビルの壁が溶けて崩れる。
　まだ、まだ止まらない。異星生命体の身体が蒸発し始める。宇宙色の身体が黒く濁り、萎み、後には微かな炭だけが残された。
　だがフラムの怒りは収まらない。フラムの憎悪は収まらない。
　後ろから付いてきた少女が躊躇するほど、彼の周囲は炎で包まれていた
「にぃ、終わったよ。だから落ち着いて」
「黙れ！　俺の怒りは、憎しみは、この程度で消えないんだよ……！」
　そしてその怒りと憎悪は、仲間であるはずの少女にすら向けられる。見境の無い感情は暴力そのものであり、しかし暴走している彼はそれを自覚できないのだ。
　未だ消えない炎を纏った右手を少女に伸ばし、

「にぃが怒っているのも、にぃが憎んでいるのも、アリスは〝許容〟するから。だから、落ち着いて」
　――炎は少女の頭に届く寸前で掻き消えた。
「……悪い」
　ぶっきらぼうに小さく謝る。そしてそのまま少女の頭をガシガシと乱暴に撫でるのだ。
　アリスとて年頃の少女だが、しかし彼女はその乱暴な彼に笑顔を向ける。髪が乱れても、撫でられた頭が痛くても、アリスは彼のその撫で方が好きだから。